

昭和二十四年八月十五日發行(毎月一回)  
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

# 慈光

第一卷・第五號

## 目次

無碍の一道……………	白井成允……………1
罪惡感と煩悶……………	山下成一……………6
引揚後の三年を顧みて……………	椎葉勝一……………7
信の旅行く人々……………	花田正夫……………10



# 無 碍 の 一 道

白 井 成 允

本稿は本年四月、名古屋求道會のために白井先生が御講話下さつた時、法友小笠原顯秀さんの御骨折で速記して下さいました。先生の御閱覽を経て居りませぬので先生の御徳を損ねるやうなことも多いと思ひますが、其の責めは皆編者にあります。

去年の今頃でありましたせう、この部屋で皆様とお目にかゝり最早一年過ぎたのでありますが、今日また御縁をいたゞいてお目にかゝります。來年はどうなるか分りません。今日は無碍の一道といふ題を出しておいたのですが、この題に就いて話せるかどうか見當がつきません。今日は今日の御縁を頂いて、私が今日まで聞かせて頂き、味はせていたゞいた肝要なことを申し上げておきたい。

佛法を聞くとは何ういふことか。これを第一に考えて見ると、佛の道を聞くことは、金儲けや病氣を癒す世間の御利益をいたゞく爲に聞くのは見當違ひです。この教を聞くとは病氣が癒る、運がよくなるという世間利益を目當として聞くのは佛法を聞くのではない。佛法の目當は他にある。それならこの教を聞いても治病金儲けが出来ぬかといへば、これも答は出来ない。肺病の人が佛法を聞いて御慈

悲に安んずる、その御慈悲に安んずるところが身体にも影響して癒ることは屢々聞くところで。然し信心が病氣に役立たないが目當ではなく、問題外のこと、佛法とはもつと大切なことを聞くことである。これを最初によく氣をつけねばならない。

それではどういふ問題が、佛法を聞く問題なのか。これは御開山聖人が滿九十歳で亡くなられたのであるが、その御滅後に、聖人の御内室であらせられた惠信尼公の御手紙の中に、聖人の思ひ出を語つて下さるが、その中に、

「山を出で六角堂に百日籠らせ給て、後世を祈らせ給けるに、九十五日の曉、聖徳太子の文を結びて、示現にあづからせ給て候ければ、やがてその曉いでさせ給て、後世の助からんずる縁にあいまいらせんと、たづねまいらせて、法然上人にあいまいらせて、又六角堂に百日籠らせ給うて候けるやうに、又百廿日、降るにも照るにも、如何なる大事にも、まいりてありしに、たゞ後世の事はよき人にもあしきにも、同じ様に、生死出づるべき道をば、たゞ一筋に仰せられ候しを、うけたまはり定めて候しかば、」  
といはれてゐる。生死出づべき道を問はれたのが宗祖親鸞聖人のい、ちであつた。降るにも照るにも、如何なる大事にも、生死出づべき道を法然上人から聞きひらかれたのである。三國の祖師を通じ



の問題は、「後世のたすかる道」、即ち「生死出づべき道」であつて、これは釋迦牟尼佛の佛道を傳入された根本の問題でありました。

生れかたり死にかはりして迷うて行く流轉の旅から出離すること、迷ひの世界から解脱することが、佛様の御悟の境界です、永遠不滅の御悟りの境界です。この佛様の久遠の御悟の境界に入ることが「生死出づべき道」である。一切の衆生がこの境界に入るやうにと願はれ、あらゆる御苦勞して下さるのが佛様の根本の願であります。

今まで出られた高僧方は生死の迷界を何時も詳しく教へられてゐる。禪宗の道元禪師は三時業といふことを厳しく言つて居られる。私共の日常のはたらきは身口意の三業のはたらきであるが、現在の凡てのはたらきがおこるのは過去の業が原因となり、そして現在の業となり、又現在の業が原因となつて、やがて將來の業を起して來る。このやうに生命のはたらきが流れつて永遠に續き、善因善果、惡因惡果と流れて行くが、のちの相である。ところが私共迷ひの凡夫の作りと作る業は無明の煩惱に原因して居て、眞實の悟りはなく、暗い智慧しかない、我執を中心として我儘に考へたり行つたりする、かゝる根元の無明によつてはてしない生死流轉の迷ひがくりひろげられて行く。この五尺の肉体、五十年か百年の肉体を自分だと思つて、自分に執着して考へたり行つたりするが、表面明らかには左様に執着してゐない様であるが、根本には皆自分を主として考へてゐる。そしてこれが知らず／＼に行爲に現れて來る。自己中心に生きてゐる。誠に淺ましいことであるが淺ましいとも知らずに教へてゐる、そこに我々の實際の形相がある。このことを我々に教へ

葉はおそれつゝしんで聞かねばならぬと古の人が教へていられる。善導大師も親鸞聖人もさう言つて居られます。

私は嘗て前田慧雲和尚の御育ても蒙りましたが、私共が和上の傍に居ると安らかな清い心持にさせていたゞくのが當でしやが、和上は時々「私は寺に生れて御佛飯で育ち、佛法を學び、お念佛申して、もう七十歳になつた。もうこの世をおいとまするのも近い、人間界を終るのであるが、來世の果報を憶うと、身の毛がよだつ。今日の果報が因となつて、その因が熟して次の果報があらはれるが、朝晩どんな種を播いてゐるのだらうか。自分は人間にあるまじき様な色々の因を播いてゐるから、人間以下の世界に墮落して行かねばならないが、それを思うと身震いする」と話された。これを聞いていて和上の様な高德な方が、かく言はるれば、一体私は何處へ往くのだらうと恐ろしく思つたものである。

印度、支那、和朝の三國の高僧が「現在流轉し來り、又流轉し去る迷界である」としみ／＼とお考へになつた。そしてそれを教えて下さるのであるが、これを離れてどうして悟りの境地に到るか、生死出づべき道を祖師方はひとすぢに求め給うた。迷界から悟界に入るにはどうしたら證することが出来るか。「後世の助からんずるいのち」、どうして地獄から離れ得るか、このことを求めることが後世の助からんずるといふ意味である。佛法を聞くとはこういうことである。

扱て人間と生れたのは容易にあり得ないことであり、百千萬劫にもあり難い稀な人間界に私共は生を受けてゐることを省みねばならない、「人身受け難し」といふことは奪ひこと、稀なこと、有り難いことでもあります。然し折角人間界に生れても、やがて去らねばな

知らせて下さるのが、お釋迦様を初め佛の心をいたゞかれた高德の祖師でありました。

私共が公明正大であると言ひ乍ら國家、社會、人類のことをあげつらうてゐるが、その中心に「俺が、俺が」がつきまとうてゐる。我執が根本に潜むからいつも迷うのであり、自分が迷うから他人を傷つけ、妻子朋友や社會を傷つけ心配させるものである。

支那の善導和尚は「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の縁有ることなし」と告白して居られる。この御言葉を聞くとき自分が現在罪惡深重の凡夫であること、を明らかにならして下さる。凡夫とは腹を立てたり嫉んだり憎んだり愚痴を言つたりして死ぬるまでかうしたことを續けて行くのである。親鸞聖人も御自身を出離の縁のない凡夫であると言はれてゐる。私共は内に煩惱が満ちていて縁に應じてそれが出て來る。怒つてはいけない、怒つたとしてもしかたがないと言ひつゝ腹を立て愚痴をこぼす。かくて三毒の煩惱が永遠のいのちを穢してゆく、家庭や社會をも不安ならしめ、自ら迷ひ社會を傷つけてゆく。全く自己中心の我執にとらへられて六道を輪廻してゆく、「現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して」ゆくのです。その必然の結果としてあさましい境界に落ちて行くのです。これは偶然ではない自ら播いた過去の因の果報で、遙かなる古から播いた因が積り積つたのです。遙かなる昔より迷ひ來り、現在に迷ひつゝあり、將來も迷つて行く「出離の縁あることなし」で、本當に因果の現れは彰らかであります。こうしたこと佛様は深く廣い御智慧から見抜かれて私共に知らせて下さるのであります。高僧方は佛様の御言の鏡に照らされて自分の實相を懺悔していられるので、高僧の御言

らぬ、五十年百年と生きつゝも夢幻の如く去つてしまふのです。第一次大戦後成金といはるゝ人が出來た。儲けた大金で別荘を建て、住み初めて間もなく胃癌となつてしまつた。その病人が臨終に、「こんな早く病氣に罹つて死ぬのなら親戚知人に不義理までして金を儲けるのではなかつた」と身悶えて死んでいつた。私自身を省みれば十年程前に腸チブスになつた、熱や脈の様で家内は非常に心配した。私も自分の生命の危さを知つて「人生五十年、もうこれで死んで行くのだが、父母をも安んぜなんだ、妻子にも師匠にも叛き、學問上師恩に何等報いても居ない。一生造惡で、そのまゝはてしまふのだ」と思つた。それから何時の間にか十年ばかり生き延びた今日、再び省みると、生命永うして恥多しで、こんなあさましいと思ふことを重ね／＼と六十過ぎとなつてしまつた。前の成金の後悔と同じことを私も繰り返してゐるのです。嗚呼、一生造惡値弘誓のお正信偈の一句、たゞこれ一つが恵まれてゐる。私共は一生造惡の生活を續けながらも値弘誓が知れないのであるが、はかりない御惠みから私は値弘誓を知らせて頂いたことが、いかに有り難いことである。一生造惡の凡夫を憐れんで喚んで下さるお慈悲、叛く私一人を佛かねてし召して必ず救うと叫ばれる佛様の御聲をき、不可思議なお慈悲に逃げられなくて頂くことが値弘誓の意であります。これこそ生れ難い人間に生れ來た所詮であります、無上のよるこびであります。

話がすこし進みすぎましたが、「生死出づべき道」迷ひのいのちから離れて悟りのいのちに進ませて頂く道を三國の祖師方が教へて下さるのであります。先づ私共に、私共のいのちは自分一八のいのちではなく色々の縁起によるものであると知らせて下さつてゐる。



五尺の肉体を自分の身体であると思つてゐるが、私の造つたものではなく父母を縁として祖先の血をうけた身であり、更に、魚類や野菜や米麥、その他日月天地の恵みを受けて生きながらへて来た私であり、「私の」というべきでなく父母國家社會天地一切の恵みによつて凡てが興へられたもので、他力であり佛力である。この佛力他力を祖師達は教えて下さるのであります。

親鸞聖人は「他力とは如来の本願力なり」とのたもつて居られます。又誓願一佛乘とも教えられた。如来の本願力、一佛乘、佛の根本の御願、この本願のお徳力で我々を救ひ送つて下さるのであるが、この佛の願を徹底して教へて下されたのが親鸞聖人の特徴であります。

佛の御願とは何か。我々にも色々の願がある。その時々々の欲望によつて違つています。昔の人が鹽断ちをして願をかけるとか、魚を断つて息子の飯を待つといつた風なものもあるが、佛様の御願はそうした感覚的な欲望ではなく、もつと深い願である。佛様の御誓によつて、一人の願でなく一切人に通ずる願、一切衆生の最後の願は何であるかを知らせて下さるのである。そうした根本の願を大無量壽經の四十八願に説かれてゐる。この最初の願は佛と成つた時には自分の國に三惡道がないであらう。若しあれば正覺はとるまいとあるが、三惡道の境界とは何であらうか。地獄の境界とはどんなものであらうか。敗戦の八月廣島の街に原子爆弾が落ちた時、十萬人が一瞬に死んだ。この時我が子を求めて惨害の街を彷徨ひ乍ら地獄の様相を思はざる得なかつた。これが人間の世の中にも現はれて来る。次に餓鬼といへば、先日参議員の某氏から、「日本の國民八千萬はアメリカの乞食をせねば餓死する、文字通りたゞで貰つてい

遊

て返す物が無い、貰はなければ餓死する、丁度類死の病人が手術臺上にのせられてゐる様だ」と聞かされて洵に悲痛な感が起つた。それにつけても佛様の衆生を樂しからしめんといふ御願が思はしめられる。人間界の實相を苦であると思召されて、苦を除かんと願ひ立たれてゐる。誠に佛の願は慈悲の御心が結晶して表現されてゐます。觀無量壽經には「佛心者大慈悲是也」と説かれてゐる。

昨年十月から年末まで胃病で床に就きました時、涅槃經を拜讀いたしました。そして御佛様の慈悲の心を泌々親はせて頂いた。特に「慈悲隨逐如三童子」の一句があるが、佛様が母牛のあとから仔牛が何處までもつきまとうて行くやうに我々を追ひかけて下さるのであります。私共がお念佛申したり、朝晩の禮拜したり、御聖經を頂いたりして如何にも佛の御心に順つてゐると思ひ揚つてゐるが、實は佛様の方が何處までも追ひついて来て下さつてゐるのです。そんなに心配して下さることをも知らずに我儘をしてゐるが、これも御存じの上で隨逐して下さるのであります。南無阿彌陀佛。

扱て涅槃經の根本問題は「一切衆生悉有佛性」で一切の人々が佛の本性を持ち合せてゐるから誰れも悟ることが出来ると言ふことを明らかにして下さつてゐる。然し一闍提(斷善根)の者は無佛性だから捨てられてゐる。この捨てられた一闍提について心を留めて涅槃經を讀んでゐると善星比丘の話がある。善星比丘は釋迦佛の子であつて佛の教を聞き初めるのであるが、高慢となり遂に聞法の生活捨て善き心根を失つて了い、あさましい境界を作つて遂に地獄に墮ち、即ち一闍提の代表となつた。佛の子であり乍ら佛に叛き地獄に墮ちて往くのであるが、佛様はこれを御覽遊ばされて、佛の御智慧において地獄の苦の劇しさをよく知られ乍らも善星比丘と共に

地獄に降りて下さる。斯くてこの墮ちる子を救はねば已まぬ。底の底まで行つて救ひ送げずばやまぬといふ願故に苦行を續けられるのであるが、善星比丘は地獄の苦があまりに激しく絶え間がないので、暫くでもよいから、この苦惱から免れたいと思つた時、こゝに久遠劫來の佛の慈悲は斯る苦惱の自分を救ひ送げやうが爲であつたかと目醒め、遂に念じつとけられた佛の願が比丘の心に泌みこんで、初めて比丘の佛性が顯れ、悟の境界に進むたと説かれてゐる。

さて善星比丘とは何者であらうか。釋迦佛の御子はラフラ尊者で、御出家後もよく佛の御教を守り、「佛の蔭は涼しい」と讃仰されてゐる。だから善星比丘とは違つてゐる。善星比丘とは他人のことではなく私共のことです。惡逆の王阿闍世が佛にお遣ひして救はれるなり、如来は一切衆生の爲に常に慈父母となり給う、世尊の大慈悲は衆生のために苦行を修し給ふことは狂人のやうであると讃仰申してゐるが、誠に一切衆生を子として慈しんで下さるのである。如来のことを一子地とも言うがこれも、一切衆生を平等に一子の如く憐愍されるからである、ラフラ尊者と同様に可愛がつて下さるのであります。即ち善星比丘は一切衆生の代表となつた佛の子である。佛は一切の衆生の己が罪から地獄におちて行くのを見られて、我が子の思ひをされて地獄の底にまでついて来て下さるのであります。こゝに御慈悲があり佛心がまします、私共も一角佛法が解つたやうに皆様に話をしているが、これは法を聞き乍ら法を誘つてゐるので、傲慢になつてゐるのであります。善星比丘とは全く私の事でありませぬ。ここに佛心を彷彿として俾はせていゝくであります。こゝで十分間程休ませて頂いて、もう一度お話いたします。

以下次號に記載

## 父と子

池山敏郎

久しくも子は**叛**しかな、  
家を捨て世を亂し  
ひたすらに進みし焰の道  
人の世の定めなきに  
しみんと心打たれて  
亡びざる正義いづこと  
大空を仰ぎし日まで  
久しくも子は叛きしかな。

久しくも父は待ちしかな、  
子を思ひ夢に泣き  
ひたすらに忍びし涙の道  
歩み度き道を歩み  
力盡き望み絶えなば  
いつにても家に歸れと  
世の人の誦りに堪えて  
久しくも父は待ちしかな。

父と子のえにし深きかな、  
厭えつゝ歎いづ  
今や共に歩む光の道  
子の歩みたどくしく  
若き日の惱み盡きねど  
求むるは父と同じく  
とこしへの**絶対價值**  
父と子のえにし深きかな。



# 罪惡感と煩悶

山下成

眞に罪惡感に徹し地獄一定の深信に到達せば茲に心に煩悶の影だにない筈である。親鸞聖人が地獄一定を叫ばせ給ひし所以は、已に無邊の大悲を拜戴し給うて、自己心内のすみぐまで明察し得る靈智を恵まれ給ひし深い御内省の懺悔感に外ならない。茲に此の煩悶を殘す余地を發見し得ぬ事と拜察するのである。煩悶とは限りなき自己の罪惡を、限りある人間の智性で、之を檢討し、之を艾鋤せんとして、終にその目的を達し得られぬが爲に生ずる心の焦燥に外ならない。斷じて安住地ではない。地獄一定の敷そのまゝが實に極樂一定の喜びに外ならないのである。されば地獄一定も亦極樂一定も楯の両面に過ぎない。恰も谷底に座して山頂を仰げばその高きを感じ、又山の頂より谷底を俯瞰せば如何にもその深きに驚くと同一である。つまりは大悲よりの鴻恩を讃仰することゝ、又自己の愚悪性を深く懺悔する事とは實に同一である。そして愚惡の魂であるとの意識の外に善へに轉せし自覺を更に藏してない。愚者その愚を知らず、いつまでも愚を出でないが、啓發を蒙りて始めてその愚を知らざるゝとき、已に愚を脱してゐるのであらうか。狂人その狂を悟らず、いつまでも狂を脱し得ないが、醫藥を受けて始めてその狂を覺るとき、已に狂が滅びてゐるのであらうか。明と暗とは決して同時には來ない。明來つて暗去るとき、省みてオオ暗かりしよと言え

のである。かくて煩悶は自分の力で己れが愚惡を除かんとして終に成らざるが爲に痛感する苦惱であり、罪惡とは安らかに自己の實相を認める態度であり、宵壤の相違であることを知らねばならぬ。更に之を詳記せんに、歷崖の頂より誤つて迂り落ちかゝつた散策人が、その危難を豫感し、憂苦措く能はざるは當然のことであるが、その將に落ちんとする刹那、幸にも手頃なる一松樹の根株を捉へ得たりとせんか、忽ちこの厄を脱がれ、その多幸を喜び、亂れし心も眞に平靜に歸し、おもむろにもと來りし路へと急ぎ得ることに轉ずるのである。この和平に歸りし心狀より、靜かに懸崖數千丈下を見下し得る餘裕を恵まれて、始めて眞に危険の極に陥りし所以を學び、その茲に到りし所以は、全く一松樹の根株の御恩なりしことを、心から感謝することゝなるであらう。

心に焦燥を感じ、狼狽の情去らぬ間は、終に自己の現相を知るに堪えず、焦燥を去らんとする努力が更に焦燥を加え、終に停止する所以を知らないのが常である。

然るに佛かねて知らしめていつまでも自力盲助の惡業已まぬ驕慢兒を、却つていよいよ見捨て賜はず、飽くまで大悲心を以てのぞませ給う御眞實の、いつしか我等の闇黒を開くべき光明となり、終にオオ暗かりしとの咏嘆を發し得るとき、眞に罪惡感が成立するのである。この時煩悶はない。懺悔又感謝交々たるのみである。

# 引揚後の三年を顧みて

熊本縣 椎葉勝一

回顧すれば昭和廿一年の初春、敗戦國民、日僑扱ひにされて、久しく住み馴れた台灣の地を追ひ立てられ、惨めな姿で祖國日本に引揚げて早くも滿三年の歲月は流れた。苦難三年の如何に永かりし事よ！ 歡樂境では十年も一日の思いでも、悲痛の三年は正に十年廿年にも値する。然しそれだけにまた未曾有の尊き体験を獲た年も事實であります。

私は引揚を前にして、こんなことを豫想していました。「祖國に引揚げた上は齊しく同胞であるから必ず同朋愛の下に温かい手を伸べて我々の再起更生を眞心から援助して呉れるに相違ないから頼もしいことだ、力強いことちや」と。然しそれは全く夢で、實際引揚げて来て見れば、戦前とは打つて變り人情輕薄、道義の類廢、どこにも鬨賣り鬨買ひの群ばかり、新聞記事は毎日強盜殺人、さては詐欺收賄等で満ちている。全く弱肉強食の人間の本能そのまゝが露骨に現はれ、未だ瀾亂の滲ましい實際をみせられて、ほんとうに情無き感と、日本の將來は一体どうなることかと、ひそかに心配した程でした。

村に引揚者連盟が出来て何か共同事業を起して相互の利益を計つて起ち上ろうと種々目論んで見ても結果が出来ないし、かといつて何かやらねば差し當り食うに困るといふ有様で、一時ずい分と迷い

致しました。然し私のこの様な希望や豫想の總ては錯覺でありました。はかない夢でありました。靜かに考へて見れば私が今日斯くの如き境遇に追ひこめられた原因は皆悉く私の自業自得の致す所で、結局、自縛の現實苦に外ならぬことに氣付いて見れば、今更に、その責を他に負はせて世の無情や他人の冷たさに不平不満を訴へるなどとは以ての外の誤りで、自ら安んじてその責を取るべきであります。「天は自ら助くる者を助く」とは全く眞理であります。こゝに呼び醒まされて起ち上るより他に途は無いのでした。

扱て、如何にして、何を爲すべきか、といふことにまた行き詰つて随分考へさせられました。如何に敗戦國民になつたとて、他を蹴飛ばしても活きるためには手段を選ばぬ底の自己中心の淺間しさを痛感させられては、何としても左様な氣にも成り得ず、徒らに唯本能的に生きんが爲にのみ働くことを止めて、何とかして御慈悲を中心にして自他共に救はれる道を見出し度いものと、あれこれと考へました末に、思ひつきましたことは、戦時中に何處の家にも供出せしめられた佛具類に不自由して居られるので、これを行商して信者巡りをして色々を教へて頂き度いと思ひ立ちました。先づ當地寺院のお住職や人吉別院の輪番の御援助を得て、早速小資本仕事を初め



ました。次に又終戦後のドサクサ紛れに各農家では各種蔬菜類の種子を一部不正商人のため随分インチキにかゝり苦澁をなめさせられたと聞きました。例へば玉葱の種と稱して普通の葱種を法外の高値で賣りつけたり、或は發芽力のない古種を賣りつけられたりして莫大の損害をうけた方々も尠くないと聞いて、何とかして一ツ確實な種子を割安に提供して上げたい、それによつて自分も生きさせて貰ひ、且つは聊かでも佛縁を結ばせて頂けば何よりの仕合せと思ひ、翌年の秋から蔬菜種子の行商も初めましたが幸に各地の旧知己もあつて信用を得て相當の好成績をあげることが出来ました。

こんな調子を二、三年續けましたが、經濟界の變動や其の他の事情で次第に困難になりましたので今度は方針をかへて、小規模な酪農を思ひ立ちました。昨秋借金して生後七ヶ月の山羊一頭を購入し名前を「瑞光」とつけ、俄か作りの假小屋で育て、間もなく種付をしましたが、爾來熱心に飼育しましたところ三月に一頭の牝山羊が産れました。當日は珍らしく朝から麗らかな春の陽をうけてお産に絶好の温かさで、六十三翁の私が生れて初めての山羊産婆役を勤めました。幸に至極安産でホットいしました。「春光を浴びて仔山羊はこの聲」と駄句つて、早速「春光」と命名しました。産後十日目に搾乳の稽古をし、私の誕生日には山羊乳で祝ひ、「有り難や草と木の葉が乳になり」、「山羊乳で今日の誕生祝ひけり」と感想のまゝ日記に誌しました。

以上、引揚滿三年の間、衣食住共に苦難の連続で來ましたが、若し私が絶対の佛の慈光に氣付かせて貰つて居なかつたら、如何なる境涯に墮在して居るかを思ひますと、全く身の毛もよだつ思いが致しますと共に、光明攝取の中に無碍の一道を歩ませて頂く身の仕

まで各所の宗教講話を聞いたが更に効果もなく、何としても始末のつかぬゼレンマに陥りて今日に至つた事情を眞剣に語られました。私も同夫人が眞摯な態度と熱意に對し、私の過去の鉢縁に照して衷心同情に堪えず、眠氣も吹き飛んで、次の點を單刀直入に申し上げました。

- 一、貴姉の事情一々お察し申し上げる。御同情に堪えぬ次第であるが、靜かに考えて見れば、それは總てが貴姉の自業自得、即ち身から出た鏝であつてみれば、我々凡人の如何とも爲し難いこと。
- 二、貴姉が眞に自己の如何とも致し難き業果を悟らずして徒らに前途に光明を見出さんとするは斷じて不可能であること。
- 三、貴姉が己れの眞實相を極め得ないことそれ自体が眞に自己内省の能力なき不眞面目な人間であること。
- 四、暗夜に燈火も持たずして長途を旅せんとする無謀と危険さを深く内觀する要あること。
- 五、貴姉が自己の不眞面目を悟らず自業自得による現實の苦惱に氣付かずして、今更に取り返しのつかぬ愚痴をならべて自らを暗くすると同時に周囲をも暗くして自他共に傷つきつゝあること、如何に淺間しき愚惡と横着に終始せんとする我儘な自己であるかを猛省すること。
- 六、自己の横着と我儘を棚に上げて、佛の信仰によつて明るく楽しい生活を獲やうとして道を求めてゐることは、言語道斷、全く佛を使役して自分の我儘を押し通さうとする、横着の上塗りを敢てする許し難い大逆惡であること。

等々と現在同姉の苦悶の核心をついて赤裸々な御話を申し、斯く

合せを深く慶ばせて頂きます。

斯うした生活の中で特にうれしく思ひますことは極く小人數ではありますが、新たに佛縁を結び同一念佛の中に慶びを共にする人々を惠まれたことでもあります。今その一つの實例を紹介いたします。本年一月に不圖した縁で旧知己月足氏を三十年振りにたづねました。私と同氏と知り合つたのは氏が十四、五才の頃でした。現在では農業に従事し各種の公職にも關係して居られますが、性來眞面目な勤勉家であるだけに、青年時代に或る動機から熱心に求道開法せられ、爾來慈光下に活動されて今日に至られた念佛者であります。ところが同氏から氏の御母堂の十三回忌に是非來て呉れと案内をうけました。當日夜八時から法座が開かれ、私は現下の世相を基にして人生問題に話を進め、眞の平和建設は各人が絶對に目醒め、各々その所を得て、而もその分を知り、その居に安んじて全力を盡す外に斷じて道は有り得ないことを私の信念の上から時余に互つて力説いたしました。が、參集の皆様も熱心に聴いて下さいました。

それから坐談に移り、種々な質問や感想やらにお答えして時が経つのを忘れて遂に午前二時頃に漸く一同が退散せられました。ところが月足氏の御親戚の若い御夫人が唯獨り居残られて、如何にも悶々の情に絶えかねた面持で切々たる自己の心境を打ち明けられて、救ひを求められました。

同夫人の語られる所では、御主人が戰死されたあと、周囲の御勸誘によつて遂に自分の意志を挫げて、前主人の弟と再婚されたものの、何となくそれに飽き足らぬ思ひが一杯で、毎日暗い満たされぬ氣持で、不安と焦燥に驅られるにつけては、何とかして今少しの苦悶を脱して明るい心となつて楽しい生活は出來ぬものかと、今日の如く我儘な横着の限りをつくしつゝも、それさへも氣付かぬ程の淺ましい罪業人である私共を斥け給はずして、遠い昔から可哀相と思召し、またそれあるがために何處までも流轉し苦から苦に轉落する外ないことを憐れみ下されて、種々に善巧方便をめぐらして今現に、斯くの如く如實の御言葉を下し給ふ佛陀の眞實心を仰いで「たと念佛して彌陀にたすけられまいらすべしと善き人の仰せを蒙むりて信する外に別の仔細なきなり」唯この御眞實一つによつて大安心させて頂く外道はありませんと約二時間に互つて力説いたしました。

終始何ものも忘れ、悲痛な面持で熱心に聞き入つて居られた同姉が、初めて宿善に催されてか久しい迷夢から覺められて懺悔と感謝の念佛にかへられました。月足氏も母堂も來られて我事の様に慶ばれ、佛力の廣大無邊なことを共に喜ばせ頂きました。翌朝、同姉が喜びに溢れた様子で御禮に來られました。私は慈々信後相續の大切なことをくれぐれ老婆心のまゝに申し上げ次回を約して別れました。想へばまことに不思議な御縁に遇はせて頂きました。これ全く私一人を助けんと思召し給ふ大慈悲無常照臨の賜ものに外ならぬと感佩申すばかりであります。



# 信の旅行く人々

(その二)

## 花田正夫

私が直接お会いし、或は間接にお聞きした方々で、私の信の旅のよき伴侶者となり、先達者となつて下さつてゐる方々を御紹介したいと願つて、この稿を誌します。

### 白光に莊嚴された人

昭和十九年六月N刑務所で、殺人強盗の罪で處刑された、年卅歳のNさんに就いて、Y課長から承つた感銘深い話である。

NさんはK市に生れたが、その時から非劇が待つてゐた。五人の子供を抱えて夫に死別したNさんの母が生活苦からインチキ置屋に再婚してNさんが生れたが、程なく離縁となり、次に常習賭博者とかゝり合ひ、泥沼の生活が續いた。Nさんは小學校を出る頃には最早親兄弟の手に負へぬ放浪兒となつた。竊盗罪を四度とはれて、自分では愈々更生する積りで大陸に渡つたが矢張り罪を重ねて大連と旅順の刑務所に服役した。年廿八歳になつたNさんは旅順の刑務所で宗教書等讀んで今度こそは更生せんと誓つてK市の姉の嫁ぎ先に身を寄せて働き初めたが、放浪癖が出て仕事に身につかず轉々としてゐる内に、金に窮して豆腐屋に忍び込むで金を盗む積りであつたが、見つけられて遂におかみさんを絞殺して死刑囚と決定されたのである。

一月にN刑務所に移送されて来て以来、獨房に座して悶々の日

を送つてゐた時、歎異鈔が差し入れられた。Nさんはむさぼるやうに繰返し讀み初めた、讀書百遍意自ら通ず、十數日の後にY課長に面會を申し出た。

「私は御存じの通りの大罪人であります。父母はありますが、兄弟が五人あります。然し今では兄弟が端書一本も呉れませんが、これは兄弟が冷いのではなく私が極悪のために、兄弟でさへ愛想をつかしたので。私の様な悪人は天下に誰れ一人として心にかけて下さる人はないと思つてゐましたところが、歎異鈔を繰返し讀んで拜讀してゐますと、私如き大悪人をことに不愆に思ふ、可愛相に思ふ、必ず救ひ送げずばおかないといふ廣大な佛様の御心を知らされました。有り難いことです、このことを聞いて貰いたかつたのです」

と告白すると、爾來念佛の聲が絶えぬ人となつた。其後看守の人間に、

「私はお蔭で晝は有り難い本を讀み、お念佛もさせて頂いて全く極樂ですが、夜は地獄です。殺した女の悪夢にうなされ續けてゐます。夜が来るといやでなりません」と述懐してゐたが、四月頃になつて獨房で踊り上つて喜こんでゐるので「どうしたのか」と聞くと、

「擄取不捨です、擄取不捨です。有り難いことです。實は一月以來念佛申して居ましても晝の間は有り難い生活が出来ても、夜は怖

しい夢に責められ續けますので、こんなことではとひそかに自分の信仰をあやぶんで居りましたが、自棄自得、身から出た錆で、當然のがれられぬ苦惱でした、逃れようと焦つてゐたことが大それたことでした。兎の毛の先にある塵ほかりの罪も、己が作りと作る宿業の結果でした。この逃れ難い業苦に沈む者のための御本願でありました。擄取不捨です。擄取不捨です！」

この日以来Nさんは「晝も夜もお慈悲の中です、不思議に夢も見なくなりました」と喜ぶやうになり、心の隅々まで御慈悲が徹到した模様が顔や姿にあらはれて来た。

六月の初旬には半紙に御佛像を謹寫し、次に數枚の紙に唯一の遺書をしたゝめた。その大要は次の通りである。

「私は前科六犯の殺人強盗の大罪人であります。然るに阿彌陀佛はこの悪人を救ふと喚んで下さるのです。何といふ有り難いこととせうか。あゝこの私に佛の御本願がなかつたら一体どうなることとせうか、思つてさへ身の毛がよだちます。然し御本願がましましても私に傳へて下さるよい方がなかつたら空しく終らねばなりません。私にとつて直接最大の恩人は亡き母でありました。未だ幼なかつた頃母の生活は貧しく苦しい惨めなものでしたが、朝夕私の枕元で母は佛前に合掌し念佛して居りました。卅歳の今日なほ母の合掌の姿、念佛の聲が、耳の底、目の奥にありくと刻まれて居ります。この母あればこそ私が歎異鈔を讀む心にもなり、お念佛もさせて頂けるのです。今や死を前にして世のお母さん達にお願ひ申します。あなた方が子供を叱る前に、心から手の合ふ人、心から念佛の出る人になつて下さい。信は徳であります、徳は必ず子供を感化するでせう。省れば私如き大悪人がこんなことをお願ひ出来た義理ではありませんが、我身につまされて申し上げずには居られないので

す。

思へば三十年の生活は悪ばかりでした。最後には殺人までいたしましたのに、斯る私を今日まで生かせて下され、その上よき教まで傳へて下さいました一切の御恩はお返しするすべもありません、やがて未來お淨土に参りまして存分にお恩をかへさせて頂きます。未來などと申しますと信じられないと言ふ方がありませんが、私にはありくとわかるのです。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

あゝ生死の境に佛あれば安心です」であつた。其後自分の死を愈々近いと自覺してか部屋に塵一つ残さず、爪の垢までも綺麗に掃除して處刑の日を待つてゐたが、六月廿八日、遂に最後の日が来た。

課長が呼び出しに行くと、それ程までに死を覺悟して居たNさんも「今日でしたか」と言ふなり眞青になつて、しばらくはうなだれてしまつた。

「何時までたつても我々はあきらめられないのだ。力なくして終るより外ないのだ。このあきらめきれぬ者のために彌陀の本願がましますのだ。ごとにあわれと思ひ召して下さるのだ」

と念佛裡に告げられる師の聲につれて、低聲の念佛に立ち歸ると共に、やがて頭をあげて「色々とお世話になりました、皆様によるしくお傳へ下さい」と別れの言葉をのべ、念佛の一聲々々に足を進めて、佛前に最後の御禮をすませ、立會ひの所長や檢事正にも「世をさわがせ申罪ありません、色々有り難う御座いました」と御禮を述べて、「何か言ひ残すことは」と聞かれると、「白骨の御文を讀ませて下さい」と申し出た。やがて許されると「夫れ人間の浮生なる相を一つ／＼觀するに、凡そはかなきものはこの世の始中終幻の如くなる一期なり云々」と讀み終ると共に處刑された。人生の嚴肅な終焉に臨み如幻如露のはかなさを自覺するNさんに白骨の御文が如何にももつたりと心に通つたことであらう。立會つた一切の人の合掌と念佛裡にNさんは大往生を遂げられたのであつた。



# あとがき

△無碍の一道は白井成允先生の御法話の速記であります。先生から特に御許可を頂いて記載させて頂きました。念佛のいのちの深く夢み込んだ、終始和顔愛語下さいました先生の御姿をお知らせ出来ませぬことが残念でなりません。終始二時間、生死出づべき道をお示し下さいましたことは大略二回に分けて記載させて頂きます。

△罪悪感と煩悶は明快な御筆を以つて山下先生が御教示下さいました。不思議な佛智に照らされて一文不知の愚が知らされ、はるがなる慈光を蒙つて三世に渡る罪業深重の罪悪に氣つかされ、それがそのまま大安心に轉じて下さるのであります。一點も煩悶の暗い影は残らぬのであります。懺悔と後悔の差も同様であります。

△推葉氏の御原稿は、數十年に亘る台灣の生活を捨てられて、無一物の引揚者となられた同氏の上に、念佛無碍の光が建現されてゐるのに襟を正さしめられます。而も法縁を難澁下の御生活の中にも各地に得られ、法雨の地に潤うのを拜して、我身の懈怠さを懺謝するばかりであります。同氏の御住所は熊本縣一武局區内一武村であります。山下先生とは永い御信交と承つてゐます。

△信の旅行く人々は漸次回を重ねて御紹介いたしますが、今回は全く無名の念佛者で極く僅かの人々に芳香を放たれたまま浮土に還られたN氏の物語を誌させて頂きました。同氏

の遺言と御佛像を現に拜見させて頂きました私には何かの機會に同氏の願が地に出来ますやうにと數年間私の心の中に秘めていたものであります。同氏の願を正しくお受け取り下さるやう願つて息ませぬ。

○ 本田篤孝師に伺ひまして、東京北多摩の全生病院の眞宗報恩會と岡山縣の長嶋愛生團の眞宗同朋會に、業病に難遊せられる方々の御見舞として雜誌を五部づつ送りましたところ、いづれも非常なお喜びの端書を頂き、念佛の華の今を盛りに咲き亂れて居ることを知らせて下さいました。特に愛生團では敗戦後に法話會も中止となり信仰雜誌もないとかの御様子を同團の栗下さんから承り心臓をしめつけられる思ひがいたしました。國生の間で時々諸仰會を開いて念佛相續して居られる由であります。

私も十八九年前、不思議な御縁で愛生團を訪づれ、一回法話をさせて頂きました。當時すでに眞宗同朋會が結ばれて居ました。確か栗下さんの御導びきで、同朋會員の御苦心で綺麗に作られた火葬場と、寝たきりで動かれぬ重病者に贈るために作られた花園を見せて貰ひ、一切の望みから絶ち切られた業病者の中にも念佛無碍の光り輝やいてゐるのに合掌させられたことでありました。

七月十四日

花田記

1990  
7.17  
}

昭和二十四年八月十日印刷 昭和二十四年八月十五日發行 毎月一回十五日發行	定價 一部金拾五圓(郵稅共) 一年分金百八拾圓(郵稅共)	名古屋市昭和區幸樂町二ノ二十九番地 編集兼 發行人 花田 あや 印刷人 本 伍 郎	名古屋千種區千種町馬走二八 印刷所 千草印刷所	名古屋市昭和區内幸樂町二ノ二九 花田正夫方	發行所 慈光社 振替口座番號 名古屋一〇四七〇番
--	---------------------------------	---	----------------------------	--------------------------	-----------------------------